

フィスカースの奇跡

フィンランド南部のアーティスト村

しばた ひさし
柴田 尚

特定非営利活動法人S・A・I・R代表



フィンランド南部のフィスカース村には茶褐色のレンガの建物が立ち、中世のたたずまいを残す。伝統的な衣服に身を包んだ女性が出迎えてくれた
写真提供：筆者（特記以外、以下も同じ）

「いまでも、たまに見とれてしまつてとがあるの」
そう言うと、ガイド役のマルチナさんは一瞬足を止めた。視線の先には緑の芝と木々、そして中世のたたずまい

を残す茶褐色のレンガの建物。それらはさわやかな初夏の日差しを浴びて、絶妙なハーモニーを奏でていた。そこにあるのはフィスカースの美しい風景。彼女がこの村に来て、9年が経つという。

森へ続く道の途中で誰かが手を振った。マルチナさんも手を振って応えた。「彼女も日本に行ったことがあるのよ」
「どうやらこは、親日家が多いらしい。彼女ははにかみながら言った。
「この村の人はみな知り合いなの」

独自のアートコミュニティの形

フィンランド南部、ヘルシンキから約100キロの地点。フィスカース村は美しい自然のなかに包まれている。「EU・日本創造都市交流2005」での欧州視察前、「フィスカース・ビレッジ」とはおそらく芸術村の一種だろうと思ひ、正直なところ、あまり興味を持っていなかった。日本にある芸

術村のことを少しは聞いたことがあるが、現代美術の世界に身をおいている自分にはいささか古くさいイメージに映っていたからだ。

ところが実際に訪れてみると、たしかに芸術村ではあるのだが、日本でのイメージとは何かが違った。2日、3日と過ごすうちに徐々にそのベールがはがれてきて、視察団のメンバーがどんどん惹きつけられていくのを感じた。この村にしかない、奇跡的ともいえるアートコミュニティの形がぼんやり見えてきたからだ。

「フィスカース村ではなく、フィスカース工場地帯と呼んでほしい」
この恰幅のよい初老の紳士、リンベリ氏は繰り返した。どうやら、メーカーとしての意識が強いようだ。しかし、日本人から見ると工場地帯というよりは、工房村といった感じだ。「何か聞きたいことがありますか」
リンベリ氏は葉巻に火をつけると、こ



しばた ひさし ●集合アトリエ「PRAHA」や、ギャラリーとスクール機能が合体した「リーセント美術館（現CAI現代芸術研究所）」など、札幌におけるさまざまなアートスペースの立ち上げや運営に関わる。1999年～2003年、札幌アーティスト・イン・レジデンス事務局長。05年7月に札幌アーティスト・イン・レジデンスはNPO法人化、S-AIRに改称し、現職。現在までに18カ国40名以上のアーティストの招へいに関わった



〈左〉フィスカース社といえば、柄がオレンジ色のこのハサミ。この地での刃物類の製造は1649年から。130年前に鍛鋼製ハサミの第1号を制作。園芸用ハサミとしては特に有名

撮影：柴永事務所

〈下〉家具工房では木製の椅子がつくられていた。村には木工や金属加工などのアーティストも多く住む

の村の歴史や仕組みを語りはじめた。彼らは、先ほどのマルチナさんの父親で、この村のキーパーソンであるらしかった。

企業による村の再生へ

フィスカース・ビレッジのルーツは、なんと1649年まで遡る。フィンランドで最も古い株式会社、フィスカース社がこの地に製鉄所を建設したことから始まる（この会社、現在ではプロダクトデザインのメーカーとして国際的企業へと発展している。機能的な園芸用ハサミや世界で初めてつくられたという左利き用のハサミ、さらにはモーターポートまで、数々の名品を産んだ会社として、欧米では知られた存在らしい）。

1900年ごろまでには、敷地内にオーナーや労働者の住宅、ホテル、学校、消防署まであったという。1977年に国際化を目指し、手狭なこの村の工場機能をアメリカに移設。村は機能を失い、ピーク時は500人ほどいた住民も去り、もぬけの殻になった。80年代に入り、フィスカース社では、会社のルーツであったこの村の再活用を検討。リンベリ氏は担当者として、この村で活動することになる。最初は、工場地帯をつくらうとしたが、費用や

法的な規制などで断念。

80年代後半に、アーティストらに声をかけ、無料スペースを提供することを提案しはじめた。腕のいい家具デザイナーが住んだことをきっかけに、15人のアーティスト、デザイナー、職人などが集まってきた。このメンバーを核として、現在では99人のアーティストらとその家族、計200人ほどが生活しているという。

アーティストの活動するジャンルは、木工、金属、アクセサリー、テキストイル、ガラスなど、20種類にわたる。社員3人以上の会社が10社、作家たちの作品を販売するショップ、レストラン、ホテル、ギャラリーなどもある。

土地は会社が所有、建物も95%が会社の所有で、格安（ヘルシンキ市内の約半分）の価格でアーティストたちに賃貸している。なお、村全体の管理はフィスカース社が行なっている。

自立的な運営が村を支える

これほど古い建物の修復、維持や芸術文化の育成にはかなりのお金がかか



ると思われるが、驚いたのは、一部の展示会以外はほとんど公的補助を受けていないことだ。修復費としてこれまでに1200万ユーロを会社が補助しているが、この村は現在、ほぼ経済的に自立しはじめているという。

冒頭で「奇跡的なアートコミュニティ」だと述べたが、それはこの部分に集約される。私自身もいくつかの集合アトリエなどのアートコミュニティづくりに関わってきたが、こんな森のなかの近代的な建物もない不便な場所に、これほどの芸術家が集まり、なおかつ経済的なパランスを保っていることが信じられなかったのだ。しかも、行政から公的な補助をほとんど受けずに。

「失敗して去った人もいるでしょう」と意地悪な質問をしてみると、10年間で10人程度しかこの村を離れていないという。売れなくて去った人はそのなかで、なんとたった1人だ。

このことから、いかに運営に成功しているか、居心地がよく、魅力的な村づくりが行なわれているかがうかが

元小麦倉庫の跡地を使ったフィスクラス村のギャラリー。ちょうど行なわれていたのは地元若手作家展。広い展示スペースに作品がゆったりと並べられていた



われる。ではその運営はどのような仕組みで行なわれているのだろうか。

1996年にアーティストや職人らの「組合」が設立され、会社と協力して運営が行なわれるようになった。そのなか

サリーや衣類、文房具など、けっして安くはないのだが、一定のセンスというか品質のよさを感じる。

村に生まれたブランド力

僕はギャラリーリストもしていたので、特にギャラリーの運営が興味深かった。ギャラリーは2カ所あり、一つでは元小麦倉庫の跡地を使ったフィンランドらしいデザインとアートの垣根があまりない地元若手作家展だったが、もう一つではエキセントリックな現代アート展が開かれていて驚いた。しかも、思ったより、展示スペースが大きく、しっかりした図録までつくっている。特に興味深かったのは、ギャラリーの入場料5ユーロを取りながら、販売もする珍しいスタイル。現代アート展のほうは30万円から数百万円の作品が何点も実際に売れていて驚いた。

つまり、この村は日本では、軽井沢のように一種のブランド力を持つことに成功しているのだ。現在、観光バスのコースの一つになり、150万人が訪れるという。会社側は今も年に100万ユーロを修復費に当て続けているが、工房村の売り上げは年に500万ユーロの黒字を出すほどになった。

会社のルーツを守り、かつ宣伝効果もあがった。また、これらの収入の一部で、バス用の駐車場をつくったり、アーティスティックな街灯をつくったりしている。つまり、小さな公共事業を行なうまでになっっているのである。

最後の夜、マルチナさんはホテルのレストランに得意のアコーディオンを持参してプロ級の腕前を披露してくれた。また、父親のリンベリ氏も演奏に参加し、親子でお茶目にセッションをしてくれた。

実は、この魅力的な紳士はこの国際的企業フィスカス社のエグゼクティブ・バイス・プレジデントでNo.2というところが最後にわかった。マルチナさんは元看護婦で、夏休みにほんの2週間このホテルでアルバイトをするつもりが、いつのまにか金工のアーティストになり、9年も経ってしまったという話も。

委員会のメンバーもわれわれ視察団も時を忘れて楽しんだ。住民たちは心からこの村を愛している。住民が200人に増えた今も変わらない「顔が見えるコミュニティ」。それがみなこの村を離れない一番の理由なのではないだろうか。☺

から選ばれたメンバーによる委員会が構成されている。委員会は、制作される作品のレベルの維持、ショップの管理、展示会の企画運営など、いわばこの村のマーケティングセクションを担っている（ちなみにリンベリ氏が委員長）。

委員会の運営は展示会の入場料、作品販売、ショップの売り上げ、スポンサー収入、会社からの援助（家賃補助）などでまかなわれている。

実際にショップを巡り、ホテルに泊まり、レストランを訪れてみて、その経済的安定の理由がわかった。アクセ